

森安孝夫 著

東西ウイグルと中央ユーラシア

森 部 豊

I

本書は、国内外の古代トルコ學を牽引し、また中央ユーラシア史研究を推進してきた森安孝夫の初めての論文集である。著者には、すでに『ウイグルⅡマニ教史の研究』〔大阪大學文學部紀要〕三一・三二（合併號、一九九二）と『シルクロードと唐帝國』（興亡の世界史5）（講談社、二〇〇七）講談社學術文庫、二〇一六）がある。前者は著者の博士論文で、タイトルのごとくウイグルⅡマニ教史を取り扱ったものであり、後者は著者の多方面の研究領域のうち、特にソグド研究・東ウイグル帝國史研究をもとに書き下ろした一般向けの概説書である。それに對し、本書は著者の研究成果のうち、著者自らが「單著でオリジナリテイ」が高い日本語論文で、かつ「歴史學的性格」が強いものを取捨選擇して編纂した學術論文集である。七三〇ページ（論文部分のみ）におよぶ大冊で、論文の内容・性格から四つのパートに分けて構成されている。

本書は、論文の本文・註などを初出時のままの體裁で載録する（すなわち改變しない）「原文主義」のスタイルをとっている。各論文發表後に明らかになった點、見解の變更點、そして本書編集時における著者の論點の新たな到達點などは、〔補記（脚注形式）〕〔書後〕という追記で説明するというスタイルをとっている。ただ、本書に引用する文書史料のテキスト・和譯などが、初出時から大きく研究が進展して變更する必要がある場合は、最新版にアップグレードされている。

以下、本書全体の構成を示した後、まず各論文の内容を紹介し、ついで本書の意義について論評してみたい。

構成

序文

第一編 東ウイグル・唐・吐蕃鼎立時代篇

1 ウイグルから見た安史の亂

2 チベット語史料中に現われる北方民族 —— DRU-GU と HOR ——

3 吐蕃の中央アジア進出

4 増補・ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について

第二編 西ウイグル・敦煌王國・河西ウイグル時代篇

5 ウイグルの西遷について

6 ウイグルと敦煌

7 敦煌と西ウイグル王國 —— トゥルファンからの書簡と贈り物を中心に ——

8 沙州ウイグル集團と西ウイグル王國

第三編 シルクロード篇

9 唐代における胡と佛教的世界地理

10 シルクロードのウイグル商人 —— ソグド商人とオルトク商人のあいだ ——

11 シルクロード東部における通貨 —— 絹・西方銀錢・官布から銀錠へ ——

12 敦煌出土元代ウイグル文書中のキンサイ緞子

13 元代ウイグル佛教徒の一書簡 —— 敦煌出土ウイグル語文獻補遺 ——
第四編 マニ教・佛教史篇

14 東ウイグル帝國マニ教史の新展開

15 西ウイグル王國時代のマニ教隆盛 —— マニ教寺院經營の實態 ——

16 西ウイグル王國におけるマニ教の衰退と佛教の擡頭

17 トルコ佛教の源流と古トルコ語佛典の出現

18 西ウイグル佛教のクロノロジ ——— ベゼクリクのグリウンヴェーデル編號第8窟(新編號第18窟)の壁畫年代再

考 ——

19 西ウイグル王國史の根本史料としての棒杭文書

II

第一編「東ウイグル・唐・吐蕃鼎立時代篇」は四本の論文で構成され、東ウイグル帝國時代(七四〇年代～八四〇年)のユーラシア東部地域の政治史を論じている。

1 「ウイグルから見た安史の亂」(二〇〇二。數字は各論文の初出年。以下同)は、マクロな安史の亂に關する概説部分とミクロで緻密な古トルコ語文書研究が融合し、安史の亂解釋に新たな視角を提示した論考である。著者は、従來の中國史研究者の視點からだけでは、安史の亂の本質は見えないと指摘し、この亂の鎮壓に動いたウイグル側からの視角を導入しようとする。そこで著者は、従來注目されてこなかったベルリン所藏のウイグル文獻斷片(マニ教文獻: Mainz 315)を再解釋し、その斷片の表面にはウイグルの安史の亂への介入が、裏面にはウイグルの牟羽可汗とマニ教團との關係が記述されている、と復元した。さらにこのウイグル語典籍斷片とカラバルガスン碑文の記述を比較・考察し、唐朝にとって、

安史の亂の最終局面における状況は極めて切迫しており、それゆえウイグルに對して何度も援軍を要請せざるを得なかったことを明らかにした。著者は、こうした文書研究の基礎に立脚し、安史の亂そのものを「征服王朝（中央ユーラシア型國家）」の先驅的形態の一つであったという見方を提示する。ただし、安祿山やその繼承者が目指した新政權は、「中央ユーラシア側の遊牧騎馬民族勢力が一本化して「南方」を支配する「システム」が熟していなかった」ため、安史の亂による「中央ユーラシア型國家」の出現は無かったのだと結論づける。

2 「チベット語史料中に現われる北方民族」（一九七七）は、ペリオが敦煌から持ち出したチベット語文書（P. t. 1283）を詳細に解讀し、そこに現れるチベット語の「Dru-gu」と「Hor」が指す内容を明らかにした。本論文自體は二章からなる。第一章では、まず、P. t. 1283のテキストと和譯を提示する。この和譯は、本書編集時点の最新版に更新されている。次に、この文書に見える記事の年代を比定して、八世紀中葉の中央ユーラシアの情勢が記述されていると結論づけ、そして本チベット語文書の成立を、吐蕃の敦煌支配時期（七八七〜八四八）とする説に賛同する。ついで、P. t. 1283に現れる「Dru-gu」がテュルク族一般を指す總稱であることを明らかにし、「Hor」の検討を行う。もともと、P. t. 1283の序文によると、このチベット語文書のもとなったのは、非チベット語で書かれた「Hor」の王が北方に派遣した五人のHor人よりの報告」であるという。従來のP. t. 1283に關する研究は、これに基づき、本文書全體を五人のHor人からの報告として分けてきた。著者もその考えに立脚しつつ、第三報告の始まる冒頭箇所を修正し、この報告に見える各民族の名稱を比定して八世紀中葉における中央ユーラシアの民族分布を描き出し、また五人のHor人の道程を検討した。その検討過程において、チベット語の「Hor」の語源がウイグルにあり、また唐時期の「Hor」がウイグルを指すという従來の一般的認識を踏まえつつ、P. t. 1283に現われる「Hor」は、ウイグルを指すだけでは解釋できないことを指摘する。特に、この文書全體からはウイグルに關する情報が詳しく描かれることから、五人のHor人を派遣した「Horの王」はウイグル以外でなければならぬとする。第二章では、P. t. 1283以外のチベット語諸史料を博搜し、「Hor」の語義を確認し、

八世紀中葉ないし九世紀初頭にかけても「Hor」はウイグルでなかったことを明らかにした。原論文の時点では、「Hor」とはチベットの北方にいる中國民族以外の有力な異民族で、かつチベットと直接領域を接しているものである」としたが、その後の著者は、「Horの王」は河西のどこかにいたソグド人であると解釋している（『シルクロードと唐帝國』、文庫版、三二一～三三四頁）。

3 「吐蕃の中央アジア進出」（一九八四）は、東ウイグル帝國と吐蕃とが西域で衝突する以前の西域情勢を、吐蕃の進出という視点で描き出した。次の「増補・ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」と大きく關係する論考である。全體は、六章からなる。一章から五章までは、それぞれ、ソンツェンⅡガムポ（六世紀末～六四九）、マンソンⅡマンツェン（六五〇～六七六）、チドゥウソン（六七六～七〇四）、チデⅡツクツェン（七〇四～七五四）、チソンⅡデツェン（七五五～七九六）の各ツェンポの西域進出の具體的様相を、漢文史料とチベット語史料を駆使して描き出している。そして、終章では、チベットの中央アジア進出を三つの時期に區分する。第一時期は七世紀後半で、吐蕃で代々宰相となつたMgar一家が主導し、パミール（カラコルム山脈・パミール高原を含む廣い範圍を指す）を通じて中央アジアへ進出を圖つた。第二時期は八世紀前半で、パミールおよびロプ地方の兩地域に進出し、東西兩面から中央アジアへ迫ろうとした。第三時期は八世紀の後半で、この時期は、安史の亂によつて唐朝の勢力が衰え、その結果、吐蕃の中央アジア進出が活發となり、八世紀の終わりにタリム盆地の南側、すなわち天山南道全域が吐蕃の勢力下にはいつたことを明らかにした。

4 「増補・ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」（一九七九）は、八世紀の終わりにウイグルと吐蕃が、北庭をめぐる争つた事件、およびその後の西域における兩者の勢力範圍を分析した論考である。七八九（貞元五年）年に北庭をめぐるウイグルと吐蕃の間で戦鬪が行われ、七九〇年にはウイグルが大敗するも、翌七九一年に最終決戦が行われた。一九七九年以前において、日本では、最終的勝者を吐蕃とする説とウイグルであるとする説とが存在した。著者は、その答えを導き出すために、カラバルガスン碑文、中世ベルシア語史料（マニ教讚美歌集・奥書）、古代トルコ語

史料（ウイグル語文書）、アラブ側史料（タミーム・イブン・バフルの旅行記）そして『資治通鑑』や新舊『唐書』などの漢文典籍史料を博搜して考察する。その結果、北庭争奪戦における最終的勝利者はウイグルであり、さらにその後の西域情勢として、天山北部・東部（トゥルファンを含む）はウイグルの支配下に入り、河西回廊からタリム盆地の南縁は吐蕃が支配したと結論附けた。

III

第二編「西ウイグル・敦煌王国・河西ウイグル時代篇」は四本の論文から構成され、東ウイグル帝國崩壊後のウイグル諸勢力のうち、西走ウイグルの動向に照射をあてた論考を収める。

5 「ウイグルの西遷について」（一九七七）は、漢文史料の再解釈に加え、ペルシア語史料である Gardizi の Zayn al-Akhhbar を利用して、八四〇年の東ウイグル帝國崩壊後の西走ウイグルの動きを跡附け、西ウイグル王国誕生に關する假説を提示した。東ウイグル帝國崩壊後の西走ウイグルは三つの集團に分かれ、そのうち最大の集團は東部天山地方（安西ウイグル）、一部は河西の甘州地方（河西ウイグル）、別の集團がカルルクの領域に西部天山地方の北側にあたるセミレチエ地方に走った。十五部からなる西走ウイグルは、龐テギンにひきいられ、途中で分散しつつも、その主要部は北庭、さらに天山を南に越え、焉耆に到達した。この龐テギンをリーダーとする安西ウイグル集團は、焉耆を據點とし、代官を派遣して北庭や西州を支配下に置いた。ところが、八六六年、僕固俊を首領とする北庭ウイグルがこの龐テギン（もしくはその後繼者）のひきいる安西ウイグル集團を倒し、さらに西州も占據して天山ウイグルを統一した。著者は、西ウイグル王國の誕生をこのように敘述する。

6 「ウイグルと敦煌」（一九八〇）は、九世紀半ば（八四〇年の東ウイグル帝國崩壊）から一一世紀にかけて、西走したウイグル諸勢力と敦煌にあった歸義軍節度使との關係を考察したものである。その敘述を通じ、九世紀後半から一一世紀後

半の敦煌の西方が西ウイグル王國の領域であったこと、西走ウイグルの内、モンゴリアから直接エチナ流域に據った「河
西ウイグル」が九世紀の終わりに甘州方面へ移動し、八九〇年頃に甘州ウイグル王國が成立したこと、甘州ウイグル王國
と沙州歸義軍節度使とが婚姻關係によって強固に結ばれていたこと、歸義軍節度使の血脈にウイグルの血が入っていた
ばかりでなく、沙州敦煌へ甘州ウイグル王國および西ウイグル王國から人口移動があり、その結果、一一世紀には沙州ウ
イグルが誕生したことを明らかにした。

7 「敦煌と西ウイグル王國」(一九八七)は、九世紀後半から一一世紀前半にかけての敦煌(歸義軍節度使)とトゥル
ファン(西ウイグル王國)との人的・物的交流が存在していたことを、ペリオ文書(P. 3033. 3036)の文書を解析して考察し
たものである。この文書は、ある場所にいた、ある佛教高僧(大徳)が、沙州の三人の僧官へ出した手紙である。著者は、
この佛教高僧の肩書を分析し、この手紙の發信地を西ウイグル王國のトゥルファンと特定し、さらに發信年代を一〇世紀
後半ころと比定した。また、この手紙に見える「瓢桃」を西瓜と推定し、一〇世紀の西ウイグル人にとっても西瓜は珍重
するものであったことを指摘する。そのうえで、當該時期におけるトゥルファン(西ウイグル王國)と敦煌(歸義軍節度使)
との密接な關係を明らかにした。そのみならず、敦煌文書に現れる「西州」を藤枝晃がコータン地方を指すと論じた點
に反論し、著者は、歸義軍時代の「西州」はトゥルファン地方にあった西ウイグル王國を指すのだと論證した。

8 「沙州ウイグル集團と西ウイグル王國」(二〇〇〇)は、6 「ウイグルと敦煌」論文で提唱した沙州ウイグルの沿革の
確認と中國人研究者が主張する沙州ウイグル獨立王國論に對する反論である。著者は、「ウイグルと敦煌」において、一
世紀初めに沙州ウイグル集團が存在したことを提唱したが、それは特に中國の學界に大きな影響を與え、ついには沙州
に西ウイグル王國や甘州ウイグル王國とは別のウイグル王國が存在したという論にまで成長した。著者は、中國人研究者
の依據する漢文史料・ウイグル語史料の解釋を再検討して批判を行い、改めて沙州ウイグルは西ウイグル王國の指導のも
とで成長したものであることを主張する。

第三編「シルクロード篇」は、五本の論文からなる。

9 「唐代における胡と佛教的世界地理」(二〇〇七)は、唐代の「胡姫」がソグド人女性であること、そして唐王朝が「東アジア」の王朝であるより「ユーラシア大陸東部」に位置する帝國であつて、シルクロードを通じ、中央ユーラシアとの關係が最重要であつたことを論じた。まず著者は、八世紀後半の唐で編纂され、日本に將來されたインド語漢語對譯字書である『梵語雜名』、同じく八世紀末から九世紀半ばに唐で作成され、九世紀中に日本に將來された「蕃漢對照東洋地圖」(現存未確認)、八世紀前半の情報を傳へる慧超『往五天竺國傳』および一〇世紀の蕃漢字書斷章(Pelliot chinois 2762裏)に見える「胡國」「胡」に對して分析をほどこし、盛唐から中唐の終わり頃までの漢語で、「胡國」はソグド國、「胡」はソグド人を指すとし、それを踏まえ、唐代の「胡姫」はソグド人女性であることを主張する。さらに、インド發祥の世界觀である四主説の多様なバリエーションを紹介しつつ、それと上記「蕃漢對照東洋地圖」とを比較して、この地圖が實は當時の唐にとつての「世界地圖」であつたこと、唐朝は内陸に目を向けていた「ユーラシア大陸の唐王朝」であつたことを指摘する。

10 「シルクロードのウイグル商人」(一九九七)は、モンゴル時代に活躍したオルトク商人および「韃靼・オルタク・オルトク」について、ウイグル文書(西ウイグル王國時代およびモンゴル支配期のウイグルスタンの人々が残した古トルコ語文書)を利用して考察し、新知見を提起した論考である。著者は、ウイグル文書の分析を通じ、西ウイグル人がユーラシア東部地域においてキャラバン交易に従事していたこと、その遠隔地交易には商人のみならず、様々な階層の人々が参加していたことなどを明らかにし、一〇世紀前後の中國・江南地域を除くユーラシア東部地域においてウイグル人ネットワークを形成していたことを主張した。このネットワークによる情報収集能力が、モンゴル勃興以降の西ウイグル王國の命運を決

定し、さらにモンゴル時代になるとこのネットワークは中国・江南にまで及んだとする。また、ウイグル商人のこのような活躍の源流は唐代に活躍したソグド商人にまでさかのぼることができると指摘する。そして、モンゴル時代のオルトク商人の源流は、このようなウイグル商人に求められるべきであり、その意味において彼らは佛教徒ないしはキリスト教徒と考えるべきだとする（やがてモンゴル時代にはムスリム商人も進出しウイグル商人を凌駕する）。

11 「シルクロード東部における通貨」(二〇〇四)は、ユーラシア東部における銀の流通について考察したスケールの大きな論文である。もともと、唐朝の支配が及ぶ以前の西域では銀銭が流通していたが、唐の支配下になると高額紙幣としての絹と計算機能を持つ銅銭が並行して用いられ、東ウイグル帝國においても絹織物が国際通貨として通用していた。このように概観した後、著者は、ウイグル文書の分析を通じ、西ウイグル時代とモンゴル時代では使用する貨幣に變化が生じることを指摘する。すなわち西ウイグル時代の現地通貨は棉布で「官布」とよばれ、銀はまだ流通していなかった（銅銭の流通はある程度あった）こと、二三・一四世紀のモンゴル時代になるとウイグリスタンでは銀と交鈔が国際通貨・現地通貨になったことを明らかにしたのである。そして、それを踏まえ、一〇世紀から一四世紀のユーラシアにおける銀の流れに論及する。この問題は、日本において宮崎市定・愛宕松男・佐藤圭四郎などが論じていたが、著者は特に大量の銀がムスリム商人によって中国から西方に運ばれたという愛宕の説を退け、むしろ一〇世紀から一一世紀のユーラシア大陸では銀が西から東に流れていたこと、そしてモンゴル時代になると、ユーラシア全体の銀動向の一環に組み込まれ、東から西への銀の流れが大きくなったことを論じた。

12 「敦煌出土元代ウイグル文書中のキンサイ緞子」(二九八八)は、ペリオ一八一窟から出土したウイグル語文書に見える「qinsai taxar」を「キンサイ（行在杭州）緞子」と解釋し、これによってモンゴル時代の敦煌と杭州（舊南宋）の結びつきを明らかにし、佛教徒ウイグル人が張りめぐらせたネットワークの存在を浮かび上がらせた。同時に、敦煌と杭州のみならず、ウイグル人による大都と敦煌、大都と杭州、天山東部と敦煌との結びつきを確認し、ウイグル・コネクション

という抽象的概念を提唱する。

13 「元代ウイグル佛教徒の一書簡」(一九八三)は、ペリオ將來のウイグル語文書 P. 4521 (新編 Pelliot ouigour 16 Bis) の分析から始まる。著者は、この文書を一九七八〜一九八〇年のパリ留學中に實見し、この文書のウラ表紙の中にある一文書の解讀をおこない、これを手紙であると斷定した。今回の論文集載録にあたり、初出時のテキストは誤りがあり不十分であるとのこと(これは原文書が貼り合わせと重ね折りの状態であったためである)、その後の調査で明らかになった最新テキストを掲載している。著者は、この手紙が書かれた年代を一二〇二年以降と推斷する。そして、これ以外にも敦煌の藏經洞以外から發見されたウイグル文・モンゴル文の佛教文書や佛教徒の銘文(ウイグル人がモンゴル文を書いた可能性がある)、あるいはモンゴル王族が發起人となった漢文碑文(寺院修復事業記念の碑にウイグル文が見える。またウイグル文が併記された碑、漢文・モンゴル文で書かれたウイグル人高官の記念碑)などで年代に明らかになるものが、いずれも一四世紀初頭から中葉のものであることに鑑み、當該時期の河西地方にはウイグル人(舊西ウイグル王國の人々)が集團で居住し、また河西地方ではウイグル語が公用語の一つとなっていたのではないかと推定する。

V

第四編「マニ教・佛教史篇」は、著者の『ウイグルマニ教史の研究』を補完するものといえる。『ウイグルマニ教史の研究』は西ウイグル國のマニ教の盛衰史の解明にとどまったものであった。それに對し、本篇は六本の論文から構成され、東ウイグル時代のマニ教から説き起し、そして西ウイグル國の人々がマニ教からやがて佛教へ信仰を變えていく様を、古代ウイグル語文書を利用し解明していくのである。

まず、14 「東ウイグル帝國マニ教史の新展開」(二〇一三)は、ウイグル可汗の本據地がモンゴル高原にあった時代、すなわち東ウイグル帝國時代におけるマニ教をめぐる諸問題のうち、牟羽可汗のマニ教改宗の時期と「ブクハン傳説」の主

人公の比定について、一九九〇年代から二一世紀にかけて史料状況が變化したことと新しい研究が出たことを踏まえ、改めて著者の自説を展開したものである。牟羽可汗のマニ教改宗の時期は、通説では牟羽可汗が中國遠征した途上、洛陽で出會った四人のマニ僧をウイグル本國へ連れて歸った時で、七六二／七六三年である。これに對し、著者は、Oltchの論文や新史料の記述から、ウイグルは七六二／七六三年以前（確定した年代は不詳）に西域經由ですでにマニ教を受容していた、という説を改めて主張する。また、「ブクハン」については、これをウイグルにおいてマニ教を保護し、眞の意味において國教化したエディズ氏出身の懐信可汗を主要なモデルとしつつ、マニ教導入者たる牟羽可汗のすがたも投影してつくられた「架空の人物」という結論を出した。

15 「西ウイグル王國時代のマニ教隆盛」(二〇〇三)は、黄文弼がトゥルファンで發見した「マニ教寺院經營令規文書」の再検討を通じ、本文書が持つ性格を明らかにした論考である。本文書は、黄文弼が『吐魯番考古記』（北京、中國科學院、一九五四）で寫眞を發表し、それに基づき、一九七五年にツィーメが部分的に内容を紹介したが、不完全なものであった。一九七八年になって、耿世民が全文テキストと翻譯を發表したが、「テキストの文字轉寫にいわゆる「ゴーストワード」が存在し、個々の單語の読み方や文章全體の解釋の仕方にも非常に多くの問題點」があるという。そこで著者は、まずこの文書のテキスト・翻譯の最新版を提示し、この文書が西ウイグル王國前期の一〇世紀半ばのものであることを確認する。次に本文書に現れる「is ayrucci 幹事」と「xroxan 呼嚕喚」の語を検證し、前者は西ウイグル王國政府から派遣された役人で、マニ寺の經營にかかわる様々な事を指圖する係、後者はマニ教僧侶の月番で、「幹事」と同様の職掌を有するもの、と解釋した。ついで、文書に現れる穀物の數量によってマニ寺院の規模を二〇〇人から二五〇人、おなじくメロンの記述によって一八〇人から二四〇人と推定し、この規模は、西ウイグル王國內では最も規模の大きかったものと判断した。そして、この文書が、高昌にあった大マニ寺院（高昌遺跡K…著者推定）とその子院（遺跡a…著者推定）にあてて出されたもので、「建前上は一切の經濟活動を許されないマニ教の寺院と僧侶に代わって國家がその財政と經營を擔當し、國教とし

ての扱いを享受してきたマニ教の寺院を従来通り保護することを保証する」ためのものであったと結論する。

著者は、一〇世紀半ばから一一世紀半ばにかけて、西ウイグル王國において、國教の地位がマニ教から佛教へ徐々に移り變わっていったと考えており、16「西ウイグル王國におけるマニ教の衰退と佛教の擡頭」(二〇〇三)において、その檢證をおこなった。まず、トゥルフアン郊外にあるベゼクリク千佛洞の中で、著者が佛教マニ教二重窟と考えている窟から發見されたマニ教徒書簡(ソグド文三件とウイグル文五件)を取り上げ、一一世紀の第二四半世紀から中葉くらいまでは、西ウイグル王國においてマニ教團の存在が確認できるとする。ついで、トゥルフアンの高昌故城の遺跡Kから發見されたウイグルマニ教文獻(T-II D17I)を取り上げる。著者は、本寫本に現れる大慕闐の名をMar Wahnman Xwarxsed (マニ教東方教區のモジャク)と復元し、また同寫本に現れるチギル族のアルスラン・イルティルギユグアルブルグチャンアルプタルカンベグが、一〇二五年の紀年を持つ岸壁銘文にも見えることを指摘し、本寫本の制作年代を一一世紀前半と考えた。次に、本寫本に見える地名(西部天山北麓にあった「アルグ國」や民族名(カルルクの構成部族もしくは分派である「チギル族」)などを踏まえ、一一世紀前半のカラハン朝領域の最東方部、西ウイグル王國最西端のさらに西方(すなわちセミレチエ)にトルコ系マニ教集團が存在していたことを推定する。そして最後に、著者はT-II D17Iの持つ意味を考察するため、別のウイグルマニ教文獻を取り上げる。このマニ教文獻は、マニ教文獻の大多数が書かれるロー言語という、より古いタイプのウイグルトルコ語ではなく、佛教文獻の大部分に見られる比較的新しいタイプのイ言語で書かれており、また佛典特有の貝葉形式の寫本であるという特徴を持つ。著者は、この寫本を一〇世紀後半から一一世紀前半のものと編年し、このような佛教的特徴を色濃く持つウイグルマニ文獻は、佛教が徐々に浸透しはじめた一〇世紀末頃の西ウイグル王國におけるマニ教團が巻き返しのために作成したものと推測する。そして、西ウイグル王國におけるマニ教の情勢に對し、天山西部北麓にいたマニ教團が危機感をいだき、その働きかけによって、同地もしくはトゥルフアン盆地でT-II D17Iは作成され、高昌にあったマニ教會に寄進されたという假説を提示するのである。²⁾

17 「トルコ佛教の源流と古トルコ語佛典の出現」(一九八九)は、トルコ佛教の源流が、トカラ佛教と漢人佛教であるという著者の持論を展開したものである。ヨーロッパパトルコ學界では、トルコ佛教の源流はソグド佛教であり、それは突厥第一可汗國時代にすでにトルコ人の間に入っていた、と認識されている。これに對し著者は、古トルコ人の佛教受容は早くても九世紀後半、本格的には一〇世紀になってからと主張する。ウイグル帝國が西方へ勢力を擴大し、東部天山地方をその勢力下に置くと、この地にいたイラン人(ソグド人) マニ教徒は、ソグド語マニ經典を古トルコ語に翻譯した。この翻譯文獻の中には、ソグド語を仲介として翻譯された宗教語彙が認められるという。そして、東部天山地方においてマニ教トルコ語やマニ教古トルコ語文獻を手本とし、佛教トルコ語や佛教トルコ語文獻がトカラ人佛教徒や漢人佛教徒の手で形成されていったと著者は考えるのである。とすれば、古トルコ語佛典にソグド語の要素が入り込むのは不思議でないとする。また、西ウイグル王國時代の天山東部地方で古トルコ語佛典の翻譯が行われたことから、西ウイグル佛教の源流はトカラ佛教であると著者は考える。

18 「西ウイグル佛教のクロノロジー」(二〇〇七)は、17論文の論旨を、さらに發展させたものととらえることができる。著者は、ベゼクリクのグリユンヴェーデル編號第八窟(新編號第一八窟)の壁畫に見える供養人とそのウイグル語銘文を手掛かりに、西ウイグル時代における佛教の變遷を浮かび上がらせる。結論のみをまとめれば、九世紀半ばに焉耆地區に都を置いた西ウイグル王國は、一〇世紀には北庭(ビシュバリク)に都を移し、あわせて高昌を冬の都とした(第5論文參照)。この時期の西ウイグル王國では、支配者層のウイグル人やソグド人はマニ教を信仰していたが、被支配者のトカラ人や漢人は佛教を信仰していた。このトカラ人や漢人が信仰していたものを西ウイグル佛教と著者は定義する。一〇世紀には北庭においてトカラ語佛典からトルコ語佛典への翻譯、また一〇世紀末から一一世紀にかけて、やはり北庭で漢文佛典からトルコ語佛典への翻譯が行われた。その際に選擇された佛典は、マニと彌勒が同一視される『マイトリシミット』、『光』にかかわる『天地八陽神呪經』『金光明最勝王經』などであった。これらトルコ語への翻譯事業の成果は一〇世紀後

半からあらわれ、徐々にウイグル人の中に佛教に改宗するものが増え、やがて一一世紀にはウイグル人の僧侶が出現してウイグル人の佛教化が完成し、ウイグル佛教が誕生すると著者は考えている。同時に、ウイグル佛教界の最高指導者として、ベゼトリクのグリユンヴェーデル編號第八窟壁畫に見える供養人銘文のシャジンIIアイグチが登場するという。

19 「西ウイグル王國史の根本史料としての棒杭文書」(書下ろし) は、二〇世紀の初めにトゥルファン地區で發見された墨書銘文のある三本の棒杭(棒杭文書)に對する最新の考察である。棒杭文書のうち、二點は古ウイグル語、一點は古代漢語で書かれている。この棒杭文書に關する研究を一九一五年に發表したミュラーの紹介順序に従い、著者は第一棒杭文書(ウイグル語)、第二棒杭文書(漢文)、そして補遺におさめられたものを第三棒杭文書(ウイグル語)として考察をすめる。従來、第一と第三の古ウイグル語棒杭文書の作成年代には東ウイグル時代説と西ウイグル時代説とがあり、また棒杭文書そのものの使用目的に對しても、學界では異なる見解が提出されていた。著者は、それに對し、第一棒杭文書を一〇〇八年、第三棒杭文書を一〇一九年と年代比定し、ともに西ウイグル王國期のものとす。ついで、三點の棒杭文書の最新のテキストと日本語譯を提示し、その使用目的を考察する。すなわち、棒杭文書とは西ウイグル王國の王族や貴族たちが佛教寺院の建造物を寄進するにあたり、その緣起や由來を棒杭上に墨書し、僧侶・俗人が集まって起工式を行う際、それを寺院建築工事の中心の位置を示して打ち込んだもので、佛塔の中心軸のシンボルであり、かつ建設豫定地の清淨化、もしくは地下の惡魔を封印するという役割を持っていたとする。

VI

本書については、すでに山下將司『唐代史研究』一八、二〇一五、一七〇(一七八頁)、橘堂晃一(『内陸アジア史研究』三一、二〇一六、一七五(一八三頁)、白須淨眞(『史學雜誌』一二五(一〇、二〇一六、八七(九七頁))の各氏によって書評が發表されている。山下書評は本稿と同様な體裁で、簡潔に全體の紹介と評をおこなっている。橘堂書評は變則的書評で、ウイグル

語資料に關する研究部分の評を中心に、第四編のみを取り上げたものである。白須書評は、本書掲載論文の紹介は省き、「中央ユーラシア型國家」という著者の術語を手掛かりに、本書を読み解いていくというユニークなものである。いずれも、各氏の専門領域にもとづく書評であり、それぞれが一讀に値する。⁽³⁾

本書が扱うタイムスパンは長く、研究対象空間も廣大で、引用史料は漢籍・古代トルコ語・チベット語など多種言語にわたる。それ故すべてに對し的確に評をなすことは、評者の能力を超えるものである。それらは、いずれも各領域の専門家による研究の中でなされていくことであろう。よって、ここでは、本書全體に對する評者の感想めいた見方を提示し、その後、特に第一編に關して評論すること、その責を果たすことにしたい。

この長大な本書を一言で言い表すことは難しいが、評者はこれを古代ウイグル帝國興亡史とみなしたい。著者自身が「序文」で述べるように、本書が扱うのは、東ウイグル帝國、西ウイグル王國、甘州ウイグル王國およびモンゴル帝國時代のウイグル人たちの活動の諸相である。そして四編からなる本書は、第一・第二編がウイグルの騎馬軍事力、第三編がウイグル（ソグド）商人の經濟力、第四編が古代ウイグル宗教史を論じたものととらえることができる。

日本語で書かれた古代ウイグル帝國に關する研究として、安部健夫『西ウイグル國史の研究』（彙文堂書店、一九五五）や羽田亨「唐代回鶻史の研究」（『羽田博士史學論文集』上・歴史篇、東洋史研究會、一九五七）を思い浮かべることができる。前者は西ウイグル王國の都の場所の考證を通じて、八四〇年以降の西走ウイグルの歴史をたどったものであり、後者は唐代のウイグル、すなわち唐の羈縻支配期と突厥への從屬期のウイグル、東ウイグル帝國時代、そして八四〇年以後の南走ウイグルの歴史をたどったものである。それらと異なり、本書が持つ大きな特徴は、東ウイグル帝國、西ウイグル王國、甘州ウイグル王國と、モンゴル時代のウイグル人たちの活動を包括的に扱っている點、ウイグルⅡマニ教とウイグルⅡ佛教という宗教を大きく扱っている點、そして古代ウイグル語史料を博搜し驅使している點に集約できるだろう。

本書は、「中央ユーラシア」の語を冠しており、また本文中では古代ウイグル語の釋讀を主としているため、あるいは

漢籍を主に利用し、中國本土の歴史を研究する「中國史研究者」は、あまり關心を持たないかもしれない。しかし、著者は本書の随所で「中國史研究者」に對し問題を提起している。第1論文の「安史の亂」を見る視點、續く第2論文における「安史の亂」前後の華北における情報、第3論文および第4論文の「唐後半期」の西域情勢、第9論文の唐代の「胡」字の解釋、第10論文のオルタク（斡脫／オルトク）商人の解釋、第11論文のモンゴル帝國以前におけるユーラシア東部地域の銀流通に關する研究は、いずれも「中國史研究」の傳統的トピックと密接な關係がある。中央ユーラシアという、より廣い視野から提示された著者の視點・結論・假説をどう受け止め、答えていくのかは、今後の中國史研究者、特に唐代史・宋代史研究者の責務といえる。

著者は前著『シルクロードと唐帝國』（文庫版、四四〇―四七頁）において、歴史研究のあり方として理科系的歴史學、文科系的歴史學を提示した。理科系的歴史學とは「原典史料に基づいて緻密に論理展開され、他人の檢證に十分堪えうる、つまり理科系でいう「追實驗」を可能にする學術的論著を指す」という。一方、「前近代の歴史史料」は「ほとんどが偶然に残ったもの」で「必要な史料がないことの方が普通」なので、歴史敘述においては「どうしても空白を埋めるため」に「學問的良心を堅持」した「推論」をせざるを得ない、それを文科系的歴史學であると著者はいう。

この言葉は、かつて宮崎市定が『九品官人法の研究』（東洋史研究會、一九五六年。再録…『宮崎市定全集』6、岩波書店、一九九二）を著わした時に「はしがき」で述べた言葉を思い出させる。本書は専門家に向けた學術書であるので、全編全論文において、理科系的歴史學全開であることは言を俟たないが、史料檢證できない部分は文科系的歴史學の手法によって古代ウイグル帝國史像を提示しているものと評者はとらえている。本書でしめされた個々の假説を崩すことは容易なのかもしれないが、それを理科系的歴史學によって新しい全體像を構築することは容易ではないだろう。その全體をみすえた檢證は、後進に課せられた課題といわねばならない。

ここでは、評者の研究關心に引き寄せて、第一編に收められた論考について附言しておきたい。

第1論文は、「安史の亂」を單なる中國史の分水嶺とのみ見るのではなく、中國地域を包括するユーラシア東部地域の歴史、あるいはユーラシア史というより廣い視野において見直すべきだという提言と受け取ることができる。日本人は古くから漢文化を受容し、その一つに漢詩があった。日本における「安史の亂」に對する主たる關心は、東洋史學界では政治史的、軍事的な事象にあるようだが、一般的には漢詩などを通して、楊貴妃と玄宗のラブロマンスとその後の悲劇に大きな關心が寄せられていたように思われる。この悲劇をつくりだした元凶としての「安史の亂」のイメージは大きく、この事件は中國の歴史の流れの中で、單純に解釋されがちである。漢文化の體現者である唐帝國Ⅱ玄宗・楊貴妃と、それを打ち壊した「異民族」出身の安祿山。こういった圖式が、グローバル時代の現在においては、陳腐なものであることは明白である。第1論文は、まさしく、中國史研究者のみならず、一般の日本人（あるいは中國人も）が囚われてきた呪縛からの解放を提言するものといえよう。

次に、著者が第2論文において、古代チベット語文書の釋讀を通じ見出した「Chan-chun-chi」に「張忠志」という漢字名をあてはめることができるという提言は、唐代史研究の古典的トピックとなりつつある河朔三鎮研究に大きな一石を投じるきっかけとなる。安史の亂平定後、唐朝は舊安史軍の將軍のうち、有力な者たちを節度使に任じて華北の各地に安堵した。しかし、彼らは自身の強大な軍事力と、唐朝側の不安定な政治状況を利用し、唐朝の命に従わず、半獨立狀態を維持したのである。このうち、盧龍・成德・魏博の三つの藩鎮がその代表的存在であり、これを指して河朔三鎮という。「張忠志」は奚族の人で、もとは安祿山の假子であり、そして安史軍の有力な將軍であった。彼は唐朝に歸順して安史の亂終結に功績があったため、唐朝から李寶臣という名を與えられ、河朔三鎮の一つ、成德藩鎮の初代節度使となった。その李寶臣は安祿山の假子であった事實を利用して、安史の亂終結後の華北地域における諸藩鎮のリーダー的存在となったのである。問題⁴は、チベット語文書に見えるように、*Hong*王が派遣した五人の使者の一人が河北方面へ行き、その地域における最高指導者として「張忠志」を見ていた點である。従來の中國史（唐代史）研究は、唐宋變革の中に、半獨立割據

した河朔三鎮を位置附けんとし、その革新性（「唐」という古い體制を打破する新勢力）を摸索しようとするものだった。そして、ほとんどの河朔三鎮研究は、「安史の亂」と切り離されて研究されてきたと言える。しかし、歴史の實態、當時の、少なくともHorn人の見方はそうではなく、「安史の亂」鎮壓後の河北においても、安祿山の擬制的血縁者（張忠志・李寶臣）が首領の位置にあるという、聯續面をとらえているのである。

安祿山がめざした獨立國家は、結局、その政權内の不安定さから崩壊して實現しなかったのであるが、見方を變えれば河朔三鎮こそが安祿山の後繼集團であり、そして安祿山がめざしつつも實現できなかった獨立國家の達成を半ば成功させた、という側面をより意識する必要があるのではないだろうか。著者は、「安史の亂」を早すぎた「征服王朝」であると評價した。著者のいう「征服王朝」は、後に『シルクロードと唐帝國』において「中央ユーラシア型國家」という術語に昇華するが、その内實は、「人口の少ない「北方」の遊牧民勢力が、豊かな農耕・定住地帯への掠奪・征服あるいはその住民との協調・融和・同化に成功と失敗を繰り返してきた約二〇〇〇年の經驗を踏まえて、騎馬軍團による軍事力とシルクロードによる經濟力に加えて文書行政などのノウハウを取り込み、元來の本據地である草原地帯に足場を残しながら、「南方」の大口の農耕民・都市民を安定的に支配するシステムを構築した」國家という。評者は、この「中央ユーラシア型國家」のひな型が、實は河朔三鎮で熟成していったのではないかと考えている。河朔三鎮の歴代節度使の出自の多くが騎馬遊牧民系であり、その軍事力の淵源は草原世界の騎馬軍であった。しかし、それだけでは、「安史の亂」以前の唐朝の財政を支えていた穀倉地域であった河北の地と、そこに住む膨大な農耕民を管理・統治することは困難だったはずである。河朔三鎮が、唐中央政府の科擧に合格しながらも、銓選を通過しなかった官人豫備軍を積極的に辟召した理由がここにあるのだろう。こうして騎馬軍團による軍事力と文書行政による農民統治、唐朝との折衝のノウハウが河朔三鎮において結びつき、それを契丹・遼や五代沙陀政權が引き継いでいったのだと評者は考えている。著者の提言は、このような中國史、特に従來の唐宋變革史觀から眺めていた河朔三鎮史像を大きく變えるきっかけになると思われるのである。⁽⁵⁾

ただ、あまりにも評者の關心にひきつけて、「安史の亂」における「中央ユーラシア型國家のひな型形成論」を強調しすぎるのは、著者の考えをゆがめてしまうことになるかもしれない。著者自身は、「安史の亂」に「中央ユーラシア型國家」の萌芽を見出すものの、最終的にその完成形ともいえるモンゴル帝國につながるものとしては、ポスト東ウイグル帝國の諸ウイグル王國を見ていると思われるからである。この點、本書の讀者は注意していただきたい。

また第3論文と第4論文は、「安史の亂」後の西域情勢を理解する上で、中國史研究者、特に唐代史研究者が目を通さなければならぬものといえる。「安史の亂」以降、中央アジアにおける唐朝の支配力は弱体化し、それは當該地域に関する漢字による記録・情報の減少となり、これによつて漢字記録をベースとする中國史研究者の空間認識範圍も縮小するように思われる。すなわち、唐前半期の「唐」の空間と後半期のそれとの間に大きな差異が生じているのだが、漢文史料だけでは、この西方の空間を認識することは困難だろう。第3・第4論文は、この「缺如」を補つて餘りあるものである。さらに、當該時期の西域情勢の理解は、ちょうどこの時期に起きた沙陀の東遷の背景を理解することにつながり、プレ五代史Ⅱ沙陀東遷史の研究においても有益であるといえる。

VII

本書を読んで氣づいたことを述べておきたい。「唐代における胡と佛教的世界地理」において、著者は、「胡姬」をソグド人の女性であることを斷定する。その斷定（推定）に、評者自身も大きな異論はない。しかし、「胡姬は美しく、都會的センスがあつたから唐文化の花形となりえた」であるとか、「胡姬が漢人やトルコ人・モンゴル人と同じモンゴロイドで、しかも北方草原の純粹遊牧民出身であつたとしたら、そのまま唐の大都市に連れてこられて、流行の最先端をゆく目の肥えた人々の集まる社交界や繁華街で、耳目を集める瀟洒で美的な存在にはなにくらう」という敘述は、論文にあつては、やや主觀的すぎるように思われる。

この部分と關聯するが、著者は「モンゴロイド」と「コーカソイド」という語句を使用し、「胡姬」を「碧眼・白皙・高鼻・卷髪というコーカソイド的特徴」を持つと表現する。しかし、この表現からは、「胡姬」すなわちソグド人女性が、歐米の「白人」女性であるかのように聯想されてしまわないだろうか。「碧眼・高鼻」という特徴はあったかもしれないが、「白皙」についてはイメージにすぎない。史料でも胡人女性を「白皙」と表現するのは、實は見當たらぬのである（大食人女性は「白皙」と記される）。

また、近年では「モンゴロイド」「コーカソイド」に代わって「東ユーラシア人」「西ユーラシア人」という概念が遺傳子學者によつて提唱されていることを紹介したい。これは、コーカソイド⇨白色人種、モンゴロイド⇨黄色人種と容易に聯想されるものに對する反省から生まれたものであるらしい。西アジアや南アジアの人からわかるように、コーカソイドといつても、實際は褐色の肌をしている人もいるからだ。實際、もともと中央アジアに住んでいたソグド人も褐色の肌だったかもしれない。こういった見方が出ていることに、讀者は注意していただきたい。

VIII

ところで、本書では前面に出して扱っているわけではないが、「シルクロード史觀論争」というものがある。この論争は、一九七七年に、岡野英二が『中央アジアの歴史——草原とオアシスの世界』（新書東洋史8、講談社現代新書）で提言した意見に端を發し、當時、岡野と護雅夫らとの間で行われたものである。その後、しばらく沈靜化していたように見えたが、本書著者が、この問題を再び取り上げるようになった。特に二〇〇七年に一般向けに著わされた『シルクロードと唐帝國』の中で「シルクロード史觀」とそれをめぐる経緯が紹介された。それに對して、もう一方の當事者である岡野は「『シルクロード史觀』再考——森安孝夫氏の批判に關聯して——」（『史林』九二—二〇〇八、一一六—一三六頁）を發表して著者の見解に應答し、「シルクロード史觀論争」が再燃したように見えた。

この論争は、「シルクロード」を歴史研究において、どう扱うべきなのかに端を發し、そこから中央アジア史をどうとらえるのかという問題に擴散している。森安・間野兩氏が提示する問題點は多岐にわたり、この「シルクロード史觀論争」を、その發端から現状まで跡附け、そこに提示された問題すべてを扱うことは、紙數の關係上からも不可能であり、また本稿が『東西ウイグルと中央ユーラシア』の書評であることから適當ではないだろう。そこで誤解が生じ、問題範圍が縮小してしまうことは承知の上で、あえてこの「論争」を(1)研究者が研究論文などで「シルクロード」という術語をどう扱うべきなのか、(2)中央アジアのオアシス都市の經濟は交易活動が主體か、農業活動が主體なのか、という2點に絞って言及してみたい。

(1)の問題は、複雑である。この問題が提起された一九七〇年代(あるいはその少し前)の具體的状況や空氣を知らない評者や若い世代にとって、「見えないもの」が多すぎる。所詮、文字を通してしか、この問題を理解するしかないが、間野や氏の考えに近い人々は、「シルクロード」という言葉の曖昧さ、それを自覺しないで安易に歴史研究に使ってきたという態度に對する不満があつたようである。そして、それは中央アジアの歴史研究者のうち、比較的新しい時代(イスラーム化以後)の研究者に共通していた認識だつたようである。ただし、著者自身は、二〇〇四年の段階で「反シルクロード史觀」に對し、「前近代の中央アジアないし中央ユーラシアに對しこの雅稱(としてのシルクロードの語―評者補)を使うことにまで異議を差し挟むのはあまりに狹量である」と反駁しつつも、「近代中央アジア史研究者が雅稱としてのシルクロードにさえ違和感を覺えるのは理解できる」と言い、近代中央アジア史研究に重點を置く人々の主張に歩み寄りもみせている。そのうえで著者は、間野が曖昧とした「シルクロード」を定義しなおし、その意味において持論を展開するに至っている。評者の基本的立場は、「シルクロード」という語の研究上での使用」に限定して言えば、著者のように定義をしたうえで使用することに賛成である。吉田豊が、

シルクロードという用語の、學問的な意味でのナイーブさも否定できない。……(そういう意味では)この語の利用

は避けるべきかもしれない。一方で前近代の内陸路としての「シルクロード」という概念の有効性を勘案すれば、學的にこれを利用する手だてを考案するべきかもしれない⁹⁾。

と述べているのも、同様であろう。ただし、著者や吉田のように、中央アジアの歴史や言語・文化を専門に取り扱い、現地語資料を用いて地道に研究を重ねてきた研究者ならば、「シルクロード」という語の取り扱いに慎重であることは言を俟たないが、その言葉が獨り歩きし、他分野の研究者や一般の人々が、曖昧なまま使用する危険性は注意しなければならぬ。その意味においては、間野の提起は警鐘として記憶にとどめなければならぬのではなからうか。

(2)の問題は今後も問い続けなければならない中央アジア史の問題、あるいは世界史にとつての普遍的な問題として残るだろう¹⁰⁾。評者自身も、かつて中國で活動したソグド人を研究した際、なぜ彼らがソグディアナのオアシス都市から外へ進出していったのかという問題については、より深く掘り下げて考察するにいたらなかった。ただ、中央アジア史にかぎって言えば、古い時代になればなるほど、確かな史料(特に現地語史料)に基づく結論を導き出すのは難しいのではないだろうか。

最後に著者に對する注文を一つ。序章ないし終章において、著者が考える古代ウイグル國史の全體像(概説)が欲しかった。著者が全四編19論文によつて明らかにし、そして見えてきた東ウイグル帝國から西ウイグル王國、甘州ウイグル王國を経てモンゴル時代のその後のウイグルを政治史・經濟史・文化史を含めて、ごく簡単にでもまとめてもらえたらと思つたのは評者だけであろうか。あるいは、これに關しては、『シルクロードと唐帝國』の續編として、別個に廣く世に問われるのだろうか。楽しみである。

- (1) 著者のいう中央ユーラシアの定義については、森安孝夫『シルクロードと唐帝國』（文庫版、五三～六六頁）、同「内陸アジア史研究の新潮流と世界史教育現場への提言」、『内陸アジア史研究』二六、二〇一一、八～一〇頁）を参照するのがよい。
- (2) 15論文と16論文は二〇〇三年に Collège de France で行った講演の内容をベースにしている。
- (3) なお、第11論文を含む『中央アジア出土文物論叢』（朋友書店、二〇〇四）については評者が『東方』二八七（東方書店、二〇〇五、二四～二七頁）で簡単に紹介しているので参照されたい。
- (4) 新見まどか「唐代後半期における「華北東部藩鎮聯合體」」（『東方學』一一三、二〇一一、二〇～三五頁）
- (5) 評者の考えの一部は、一般向けではあるが、森部豊「安祿山——「安史の亂」を起こしたソグド人」（山川出版社、二〇一三）を参照されたい。
- (6) すでに本書の書評を發表した山下将司、橋堂晃一、白須淨眞の各氏は、いずれもこの問題には觸れていない。この「再燃」した「シルクロード史觀論争」に關し、若手研究者がもつとも參考すべき論評は、齊藤勝の『シルクロードと唐帝國』の書評（『唐代史研究』一一、二〇〇八、八七～九四頁）であると評者は考えている。
- (7) 森安孝夫「序文——シルクロード史觀論争の回顧と展望——」（森安孝夫編『中央アジア出土文物論叢』、朋友書店、二〇〇四、i～vii頁）。なお、ここで言う近代中央アジア史研究に重點を置く人々とは、堀川徹、堀直、宇山智彦を指す。また森安孝夫『シルクロードと唐帝國』（文庫版、八五頁）においても、同様の考えを提示している。
- (8) 森安孝夫『シルクロードと唐帝國』、文庫版、六六～六七頁。
- (9) 吉田豊「ソグド人の交易活動の實態——ソグド人の通商文書などを題材に——」（帶谷知可編『中央アジア』、朝倉書房、二〇一一、三九四～三九五頁）
- (10) 著者は、自身のホームページ (http://www.let.osaka-u.ac.jp/foyoji/members/moriyasu/moriyasu_silk.html) で、東南アジア史を専門とする桃木至朗大阪大學大學院教授のコメントを引用しているが、示唆的である。
- 東南アジアの港市國家論も、かつては貿易一本槍で農業を無視していたのですが、現在では、一部の例外を除いてたいていの國家で農民が多數であることを認めつつ、「しかし農業が國家を生んだとは言えず、國家權力を必要としたのは貿易だ」「農業社會の發展も内在的的發展でなく貿易の刺激によっておこっている」などの論點を深めています。東南アジアの強みは大航海時代以降に、「西洋人の目の前で貿易によって國家が生まれていく」様子が詳しく記録されていることです。結果として、農

業生態論の本場である東南アジアで交易國家論が重視され続けているのは、論理的なレベルアップに成功したた

めです。

二〇一五年二月 名古屋 名古屋大學出版會
一三種 一六八四二二頁 一六〇〇圓十税

【附記】

本稿は、平成二八年度關西大學在外研究制度による成果の一部である。また、本稿はパリで執筆したため、Collège de FranceやEcole française d'Extrême-Orientの圖書館に所蔵していない書籍や書誌情報の収集に関しては、史學會、内陸アジア史學會、土居楓氏（關西大學大學院生）の協力を得た。謝意を表します。